

このパンフレットについて

本パンフレットでは、平成30年度「地域づくりハンズオン支援事業」の概要と支援対象団体の取組についてご紹介します。多様な地域課題に向き合い、課題解決に取り組む支援対象団体の活動と想いをご紹介することで、被災地内外で地域づくりに取り組む方々に気づきを提供し、新たな挑戦を育む一助となれば幸いです。

なお、支援対象団体の取組の進展については、「新しい東北」官民連携推進協議会ウェブサイトでご紹介いたします。下記QRコードからご覧いただけます。



地域の未来を創る。 その挑戦を支える。



お問い合わせ

復興庁 総合政策班（「新しい東北」担当）

TEL/03-6828-0223 FAX/03-6828-0292

<http://www.reconstruction.go.jp/>

新しい東北

はじめに

事業の背景・目的

東日本大震災の被災地では、人口減少、高齢化、産業の衰退などの地域課題が顕著となっており、復興・創生の加速に向けて、地域づくりやコミュニティの再生などソフト面での取組を充実させ、課題解決につなげることが求められています。

多くの自治体・民間団体等が既に地域課題の解決に向けた取組を行っていますが、取組をさらに進展させるには、地域内外の官民の主体が連携・協働し、ともに壁を乗り越え、先導的な取組を育てていくことが求められます。また、そのうえで、被災地の未来を切り拓く取組事例とそのノウハウ・発想を発信し、広く共有することが重要です。

こうした背景を踏まえ、先導的な地域づくりの取組へのハンズオン支援を行い、持続可能な形で定着(自走)させるため、「地域づくりハンズオン支援事業」が実施されました。このパンフレットでは、平成30年度「地域づくりハンズオン支援事業」及び平成29年度の先行事業※1における取組とその成果について、ご紹介します。

※1:平成29年度「地域づくりハンズオン支援事業」、「共創力で進む東北プロジェクト」。

目次

事業の概要	
地域づくりハンズオン支援事業とは？	3
専門家派遣型 「三人四脚」でともに歩む	5
共創イベント型 アイデアを集めかたちにする	7

支援対象団体の取組 専門家派遣型	
平成30年度支援対象団体の取組	9
一般社団法人雄勝花物語	
気仙沼まち大学運営協議会	
野蒜まちづくり協議会	
一般社団法人日本カーシェアリング協会	
一般社団法人雄勝花物語	11
花と緑の力でつながりを生み出し雄勝の未来をみんなでつくる	
福島県国見町	13
～平成29年度の支援対象団体の今～	
高校のない小さな町を「人生の学校」に変えていく	

支援対象団体の取組 共創イベント型	
平成30年度支援対象団体の取組	15
宮古観光創生研究会	
特定非営利活動法人移動支援Rera	
小町温泉組合	
大堀相馬焼 松永窯	
宮古観光創生研究会	17
「日常を開く」がキーワード!	
地域ぐるみで生み出す観光なりわいアイデアソン参加レポート	
宮城県気仙沼市	19
～平成29年度の支援対象団体の今～	
人を育むまちと共創の力が生むシェアリングエコノミー	

研修 とともに学び高めあうプログラム	
研修の概要	21
交流会型研修/ファシリテーター育成研修	
研修参加者インタビュー	22

地域づくりハンズオン支援事業 支援対象団体 ※2

岩手県	
平成30年度	掲載ページ
宮古観光創生研究会/宮古市	P.15、17・18
平成29年度	
一般社団法人SAVE TAKATA/陸前高田市	
シネマ・デ・アエル実行委員会/宮古市	
一般社団法人マルゴト陸前高田/陸前高田市	
さかなグルメのまち大船渡実行委員会/大船渡市	
福島県	
平成30年度	
小町温泉組合/小野町	P.16
大堀相馬焼 松永窯/福島県広域	P.16
平成29年度	
国見町	P.06、13・14
二本松市	
Uniy/田村市	
株式会社 concept-village/郡山市	
福島オープンイノベーション推進コンソーシアム/郡山市	
大堀相馬焼 松永窯/西郷村	

宮城県	
平成30年度	掲載ページ
一般社団法人雄勝花物語/石巻市	P.09、11・12
気仙沼まち大学運営協議会/気仙沼市	P.09
野蒜まちづくり協議会/東松島市	P.10
一般社団法人日本カーシェアリング協会/石巻市等	P.10
特定非営利活動法人移動支援Rera/石巻市	P.15
平成29年度	
多賀城市	
山元町	
筆甫地区振興連絡協議会/丸森町	P.06
一般社団法人ワカソク/仙台市	
気仙沼市	P.08、19・20
石巻うまいもの株式会社/石巻市	P.08
東北広域	
平成29年度	
シニアプログラミングネットワーク	
一般社団法人東北インアウトバウンド連合	

※2:平成29年度「地域づくりハンズオン支援事業」、「共創力で進む東北プロジェクト」、平成30年度「地域づくりハンズオン支援事業」の支援対象団体。

被災地の地域課題解決に伴走する

- 東日本大震災の被災地が抱える地域課題を解決するため新たな取組に挑戦するNPOや自治体等を、復興庁と専門家が1年間にわたり「三人四脚」で伴走支援します。
- 地域の担い手育成、地域資源の活用、交流人口拡大など、地域の抱える課題に応じて、オーダーメイドの支援を提供します。

地域内外をまきこみ課題解決を図る

- ハンズオン支援の対象となった団体(支援対象団体)と専門家・復興庁が中心となって、地域内の住民・行政・NPOや、地域外の団体・関係人口※1・様々な知見を持つ外部のパートナーと連携する体制を構築し、ともに課題解決に取り組めます。支援終了後は、自律的に取組を継続(「自走」)することを目指します。

※1:「関係人口」は、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々を指す。

地域課題に取り組む体制を築く

地域内で連携する + 取組に伴走する + 地域外とつながる



課題解決に向けてともに取り組み「自走」する

支援のかたち

1 「三人四脚」でともに歩む

専門家派遣型

Point 1 /

地域に入り込んで課題解決をサポート

復興庁、専門家が地域に入り込み、丁寧に課題解決の取組をサポートします。

Point 2 /

地域内外との関係性の質を高める

支援終了後の「自走」を見据えて地域内外との信頼関係を築くサポートに力を入れます。

Point 3 /

支援対象団体相互の交流と連携を図る

支援対象団体が一同に会する研修で、互いに励まし合い、連携する関係を築きます。

数字でみる

専門家派遣型支援 1団体あたり年間目安

専門家との打合せ実施回数 **20**回～

関係者とのワークショップ **30**時間～

新しい外部とのつながり **10**団体～

2 アイデアを集めかたちにする

共創イベント型

Point 1 /

共創イベントで多様な課題解決のアイデアを募る

地域内外の参加者が集い、ともにアイデアを創造する「共創イベント※2」を開催します。

Point 2 /

集めたアイデアをかたちにする

アイデアの実現に向けて、復興庁、専門家、外部パートナーが伴走支援します。

Point 3 /

「自走」に向けてファシリテーション力を育成する

多様な人々とアイデアを創造するファシリテーションのノウハウを研修を通じて伝えます。

数字でみる

専門家派遣型支援 1団体あたり年間目安

共創イベント参加者 **33**名～

新しい外部とのつながり **51**名～

育成したファシリテーター **50**名～

※2: 支援対象団体に加え、高校生などの若い世代や地域内外から参加者を募り、メンター(助言者)、ファシリテーターらとともに、課題解決のアイデアを探索する1泊2日のイベント。

「三人四脚」でともに歩む

地 地域の抱える多様な課題の解決を、
専門家・復興庁がきめ細かく支援します。

- 幅広い世代を地域づくりに巻き込むには？
- 活動の財源を継続的に確保していくには？
- 地域資源を活かして収益事業をつくるにはどうしたら？
- 組織のビジョンや役割を明確にするには？
- 取組の成果を多くの人に知ってもらうには？



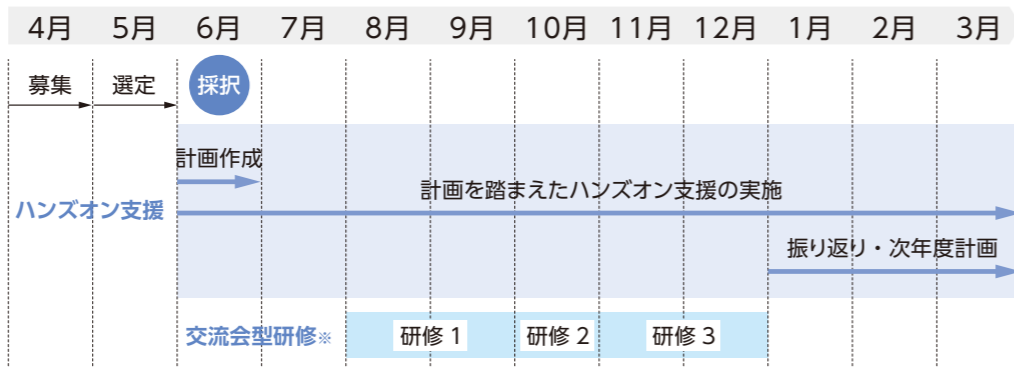
支援対象
団体



専門家 復興庁 と課題解決に取り組む

- 対話の場をつくり、アクションのきっかけに! 専門家/コミュニティ形成
- 事業・寄付・助成・クラウドファンディングを幅広く活用! 専門家/事業計画策定
- ターゲットを決め商品開発しさらに改善を! 専門家/地域資源活用
- チームの想いが大切、先行事例も参考に! 専門家/組織・人材開発
- 伝えたい価値と相手を明確にし、効果的にメディアも活用! 専門家/情報発信・PR

1年間の支援の流れ



※:支援対象団体相互及びその他の地域外の一般参加者との交流と連携を図ることを目的とした1泊2日の全3回の研修。詳細はP21をご覧ください。

支援を通じた地域の変化

Before / 支援前の状況

津波被災後の低平地の利活用を実現するには？

雄勝花物語は、津波被災した低平地を花と緑の力で再生し、人の営みとつながりを取り戻すことを目指していました。

住民の学びと実践を市全体に広げるには？

気仙沼まち大学運営協議会は、震災後に広がってきた住民の「まちを良くする」取組を、学びと実践を通じ加速させる方策を模索していました。

まちづくりに多くの住民を巻き込むには？

野蒜まちづくり協議会は、津波被災後に高台移転を経験。再スタートした地域のまちづくりに多くの住民を巻き込むことを目指していました。

被災地発の仕組みを全国に広げるには？

日本カーシェアリング協会は、石巻市で生まれた住民主体の支え合い活動「コミュニティ・カーシェアリング」の普及を目指していました。

After / 支援による変化

官民で話し合いを重ね計画を具体化!

行政、民間事業者、大学などを巻き込んだ話し合いを重ね、低平地の整備・利活用計画を具体化。実現に向け動いています。

幅広い学びを育むまちの姿を具体化!

子どもからシニア層、起業からまちづくりまで幅広い年代・分野の学びと実践を育む仕組みを検討し、実現を図っています。

子育て世代との対話から新たな一歩へ!

次の世代を担う子育て世代との対話の場を設けて対話を行い、まちの現状と将来に向けた新たな一歩を検討しています。

他地域への仕組みの普及を実現!

ハンズオン支援を活用して他地域へ動きかけ、岡山県で「コミュニティ・カーシェアリング」実証が始まりました。



話し合いの様子



学びのプログラムの様子



対話イベントの様子



岡山県での実証開始時の様子

Voice / 支援の感想

低平地利活用の構想(雄勝ガーデンパーク構想)を具体化して図面に落とし、石巻市に提出することができました。ともに検討を進めてきた行政との連携も深まりました。

雄勝花物語 徳水さん

団体の特性・事情を紐解きつつ、丁寧に今後の方針の整理をしていただきました。日ごろの業務の中で持つことが難しい、客観的な視点からのアドバイスが大変役立ちました。

気仙沼まち大学運営協議会 佐藤さん

新しい視点や考え方が加わり、事業の整理や子育て世代を対象とした新たな取組を実施できました。専門家と連携して事業を実施することはよい経験となったと感じています。

野蒜まちづくり協議会 菅原さん

今回の支援で石巻市の取組を地域外に広げるためのプログラムを作り、それを活かして普及の成果を挙げることができました。今後もさらなる普及に取り組んでいきます。

日本カーシェアリング協会 吉澤さん

支援終了後の活動

筆甫地区振興連絡協議会 / 宮城県丸森町

平成29年度支援を通じて開店準備を進めた地域のお店「ふでいち」が、平成30年5月に正式オープン。さらにその後、食堂事業(ふでいち食堂)や移動販売事業も開始。地域課題の解決を事業を通じて進めていく取組が成果を挙げています。



移動販売の様子

福島県国見町

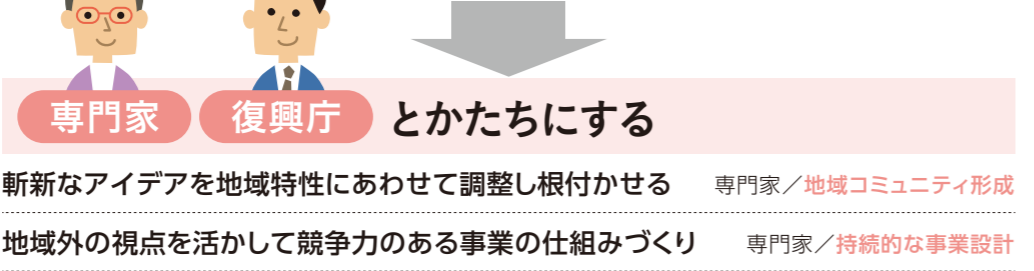
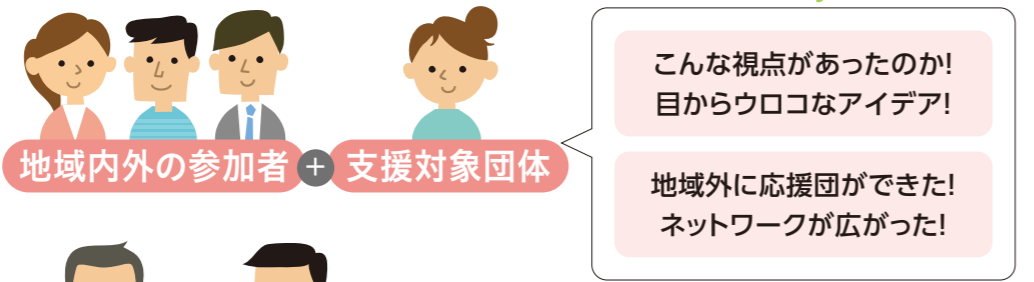
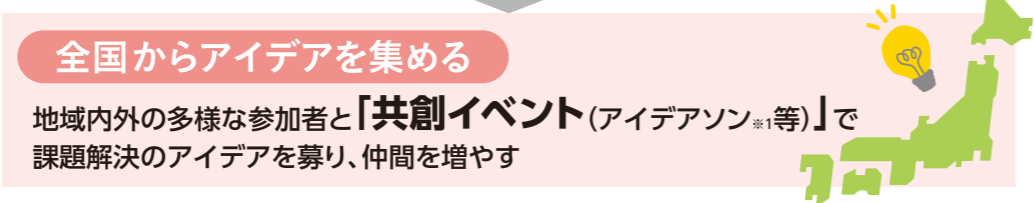
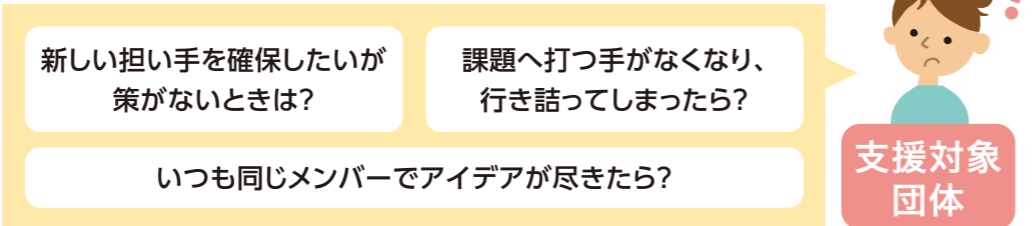
町を「人生の学校」にしようとして、平成29年度支援を通じて開始した中学生～若手社会人向けの学びのプログラムを継続開催。さらに、短期滞在型のプログラム「短期プログラム」を実行。学びを通じて地域内外の若者との深い結びつきが生まれています。



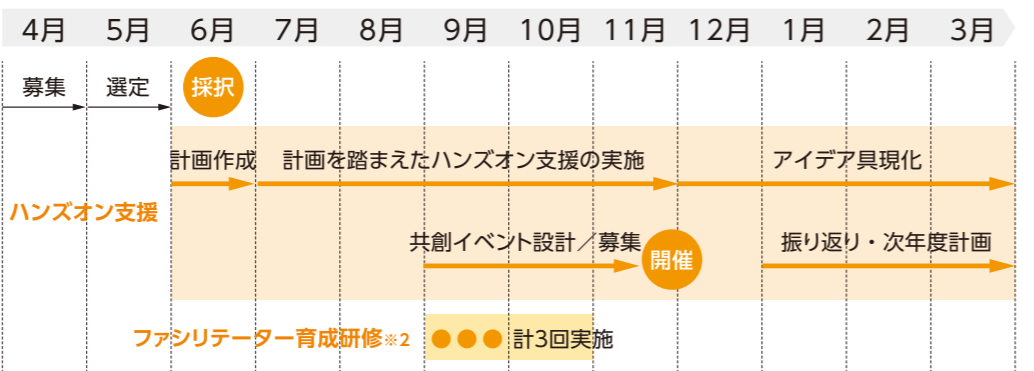
短期プログラムの様子

アイデアを集めかたちにする

多 様な地域課題解決のアイデアを地域内外から募り、その実現までサポートします。



1年間の支援の流れ



※1:「アイデアソン」は、「アイデア」と「マラソン」を組み合わせた造語。多様な主体が集まり、主体間の相互作用を通じて、課題解決に向けたアイデア創出や新たな商品・サービス・アイデアの創造を目指す共創の場を指す。
 ※2:多様な人々とアイデアを創造する共創イベントの地域内での定着を目的としたファシリテーションのノウハウを伝える研修。詳細はP21をご覧ください。

支援を通じた地域の変化

Before / 支援前の状況

地域資源を活かすアイデアは?
 宮古観光創生研究会は、観光まちづくりを目指す地域の若手団体。宮古市の地域資源に触れ、それらを活用するアイデアを模索していました。

データからどう価値を生むか?
 移動支援Reraは、石巻市で震災後の移動支援に従事。「移動」に関するデータの収集・活用・発信の方法を模索していました。

若者を巻き込む仕掛けとは?
 小野温泉組合は、小野町が若者たちによる新しいチャレンジが生まれる地域になるためのアイデアを模索していました。

伝統工芸を未来に受け継ぐには?
 大堀相馬焼 松永窯は、震災で打撃を受けた窯元が家業の枠を越え相互に連携し、新たな担い手を確保・育成する方策を模索していました。

After / 支援による変化

観光の魅力向上のアイデアを具現化!
 共創イベントで得られたアイデアの中から、宮古の飲食店の紹介マップを作成する「食通プロジェクト」などを具体化中。

官民協働でアイデアをさらに磨く!
 「移動」に関わるデータの使い方に関するアイデアを集め、国や民間事業者などを集めた研究会でさらに磨き上げています。

アイデアを町に広め、実行へ!
 共創イベントで若者を巻き込むアイデアを集め、町の広報誌で発信。共感と協力を募り、アイデア実現に向け動いています。

未来の担い手のあり方を定義!
 共創イベントで出たアイデアを基に、目指す未来の担い手のあり方を明確化。その実現に向けた仕掛けづくりを始めました。

Voice / 支援の感想

支援を通じて新たな視点や繋がりが得られました。また少しずつですが、地域に暮らす次世代の若者が学びの場や活動に参加し出し、世代を超えた学びのサイクルを築くための一歩を踏み出しました。
 宮古観光創生研究会 花坂さん

地域の課題感を共有するためのデータ活用は、必要な知識も技術もなく、取り組みにくい「歯がゆい」分野でした。今回の支援による取組の進展と新たな関係構築に期待しております。
 移動支援Rera 村島さん

地域に変化を与えるまでの段階には来ていないものの、高校生の参加を呼びかけたことで、地域の担い手の世代間の融合が図られました。この芽をさらに育てていきたいと思っています。
 小野町温泉組合 二瓶さん

未来の担い手のあり方の共通認識を作り、見える化することで、次世代の担い手にやりがいを感じてもらえるようになったと思います。対外的にも自信を持って発信できるようになりました。
 大堀相馬焼 松永窯 松永さん

支援終了後の活動

石巻うまいもの株式会社 / 宮城県石巻市

石巻うまいもの株式会社は、平成29年度に行った共創イベントのアイデアから、「石巻金華茶漬け」を開発。月1万食売れる大ヒット商品となっています。同じく共創イベントのアイデアを参考に、ファーストクラス機内食への売り込み中。新たに「おかず」シリーズも検討中。



石巻金華茶漬け(さんま茶漬け)

宮城県気仙沼市

気仙沼市では平成29年度に実施した共創イベントで、シェアリングエコノミーによるまちの活性化のアイデアを募集。イベントで磨き上げた子ども服シェアサービスのアイデアで、若者が実際に起業。「みんなのたんす」というサービスが生まれました。



「みんなのたんす」店舗の様子

低平地
×
交流人口

雄勝花物語による低平地利活用及び 交流人口拡大プロジェクト

Pick up P.11へ

一般社団法人雄勝花物語



Leader's Profile / 徳水利枝
一般社団法人雄勝花物語 代表
宮城県石巻市雄勝町出身。雄勝町で
個人塾を経営していたが震災後に雄
勝花物語設立。「人と繋がり希望を紡
ぐ」をモットーに、地元住民や多くの
ボランティアとともに「雄勝ローズ
ファクトリーガーデン」を運営。

一般社団法人雄勝花物語の活動する宮城県石巻市雄勝町は、震災で中心部の商店街が大きな打撃を受け、震災前約4000人だった人口が約1500人まで減少(平成30年5月時点)。同団体は、震災後、雄勝に慰霊と交流・憩いの場を作りたいという思いで「雄勝ローズファクトリーガーデン」を一から造成し、その運営を行っている。平成30年には、災害復興道路の建設に伴い、元々あった場所から低平地エリアへ移転し活動を続けている。ガーデンの整備には大学や



専門家等のほか、延べ約8000人のボランティアが協力。ガーデンは地域における交流の拠点ともなっている。今年度は、交流人口のさらなる拡大による雄勝の再生に向けて、ガーデンの花と緑を活用した収益事業の安定化と、周辺に広がる未利用の低平地を活用していくための計画の具体化を進めてきた。収益事業の安定化に向けては、大学や

専門家、地域の事業者と連携し、ガーデン内に新たに設置するカフェの事業や、雄勝と地域内外のつながりを育む商品・サービス、ツアープログラムを具体化。実際に提供しながらブラッシュアップを進めてきた。ガーデン周辺低平地の利活用計画は、民間事業者・行政とともにワークショップを重ねて具体化。次なる展開へ向けた取組が現在も進んでいる。

人材育成
×
まちづくり

まちを良くする それぞれの一步を応援する 「気仙沼まち大学構想推進プロジェクト」

気仙沼まち大学運営協議会

Leader's Profile / 成宮崇史
【写真前列・右から2人目】
気仙沼まち大学運営協議会事務局
NPO法人底上げ理事
東日本大震災発生後、単身ボランティアとして気仙沼に入り、移住。NPOの活動では市内の教育の魅力化を推進。気仙沼まち大学運営協議会では様々な機関や団体と協働した人材育成のプラットフォーム作りに従事。

宮城県気仙沼市では、震災後、復興と地域活性化を目指し、数々のプレイヤーにより「まちを良くする」取組が活発に行われてきた。そうしたプレイヤーを育む「学び」の場を充実させ、「実践」へとつなげる循環を生むため、官民が一体となりチャレンジを続けている。「気仙沼まち大学運営協議会」は、行政・金融機関・民間団体が連携して設立した組織。「まちを良くする、それぞれの一步を応援する」というミッションのもと3年前に活動をスタートした。これまで、新たなチャレンジを志すプレイヤー



や市内の各種人材育成プログラム卒業生のアフターサポート、会員制シェアスペースの運営等を行ってきた。今年度の取組では、改めて運営協議会の活動を見つめ直し、活動を進展させるため、気仙沼まち大学としてのビジョンの明確化や、運営協議会内の体制・役割の整理を行っている。さらに、市内で既に人材育成の取組を進めている団体

や個人講師とのパートナーシップを強化し、連携イベントの開催等を進めている。また、子どもから高齢者まで多様なプレイヤーの「学び」を支援していくには、まち大学の取組を住民にとって身近なものとするのが重要となる。そこでまずは気仙沼まち大学の認知度向上に向け、ウェブサイトリニューアルを始めとした情報発信の強化に取り組んでいる。

高台移転
×
まちづくり

ふるさと野蒜の未来をつくる！ 安心あったかプロジェクト

野蒜まちづくり協議会

宮城県東松島市野蒜地区は、震災による津波等で大きな被害を受けた。人口は震災前の約4800人から約2500人まで減少している(平成30年3月時点)。また、震災後、津波被災エリアの住民の多くは高台への防災集団移転を選択。高台での住宅地の造成、仮設住宅からの転居を経て、平成29年9月に移転先で新たに自治会が設立された。野蒜まちづくり協議会(まち協)は、高台に新設された3自治会と、既存の5自治会をあわせた8自治会と連携しながらまちづくりに取り組む、野蒜地区内全戸加入の住民自治組織である。震災後、大きな変化を経験した野蒜地区の未来を、地域住民が手を取り合って築いていきたい—そんな想いから、まち協ではまちづくりに関わる住民の増加を

目指し、様々な活動を行っている。今年度の取組では、まずまち協がどんな地域の姿を実現したいのかを明確にするため、コアメンバーを中心に話し合いを重ね、ビジョンを明確化した。その上で、これまでまち協が関わりをもつことが少なかった子育て世代と連携するための取組を進めている。また、幅広い世代の住民が楽しみながらまちと関わる機会を作るため、まち協主催の文化祭や、まちのイメージソング作成に着手。このほか、まち協の活動を広く知ってもらうために文化祭の広報誌作成にも取り組むなど、あたたかい野蒜の未来を築くための活動を精力的に行っている。



Leader's Profile / 菅原節郎
【写真中央】
野蒜まちづくり協議会 会長
震災を機に、一地域住民としてまちづくりの活動に参加。平成30年度にはまち協の会長に就任。孫と音楽と笑顔を愛する地域のリーダー。同じく音楽を愛する副会長2名とともにまちづくりに取り組む。

コミュニティ
×
地域交通

コミュニティ・カーシェアリングの プログラム化

一般社団法人日本カーシェアリング協会

一般社団法人日本カーシェアリング協会は、宮城県石巻市を拠点に、寄付で集めた車を地域住民によるカーシェアリング(コミュニティ・カーシェアリング:CCS)や幅広い社会貢献活動に活用する団体。震災後、車が不足していた石巻市において寄付で集めた車両を活用して、仮設住宅等でのCCSを開始した。CCSは住民が自らルールをつくり、運営する。移動手段確保に加えて、地域の共助の力を高めることにも貢献している。協会では、東日本大震災から生まれたCCSで他地域の課題解決に寄与したいという思いから、今年度、CCSの普及に本格的に着手した。ハンズオン支援を活用しながらCCS導入支援プログラムを開発。シンポジウム開催等を通じてCCSに関心を持つ地域とつながり、石巻で



きた仕組みの横展開を進めている。既に岡山県の2地域でテスト導入が始まっており、成果が出始めている。寄付車を活かした多様な社会貢献を目指す協会は、石巻市内の宿泊施設と連携して宿泊客向けのカーシェアリングも

Leader's Profile / 吉澤武彦
【写真中央・左から6人目】
一般社団法人日本カーシェアリング協会 代表理事
兵庫県姫路市出身。立命館大学を卒業し、大阪で6年間会社勤めした後、本格的に社会活動に従事。震災後、一般社団法人日本カーシェアリング協会を設立。以後、石巻で取組を続けている。

企画。二次交通確保に悩む地域の課題解決と観光振興に貢献している。その他、協会の活動の価値を広く伝えるためにメディアを活用する等、戦略的な情報発信にも取り組んでいる。

Pick up 一般社団法人雄勝花物語

花と緑の力でつながりを生み出し 雄勝の未来をみんなで作る

雄勝花物語による低平地利活用及び交流人口拡大プロジェクト



雄勝花物語メンバーと、千葉大学園芸学部秋田典子研究室、「花と緑の力で3.11プロジェクト」委員長の鎌田秀夫さん、地元ボランティアの方々と撮影した記念写真。雄勝花物語では、このように多くの人々とのつながりを育みながら活動している。

共感と支援の輪が造りだした 希望のガーデン

雄勝花物語の運営する、宮城県石巻市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」は、四季折々の花や樹木、ハーブで鮮やかに彩られた美しい庭園だ。「穴太衆積み(あのうしゅうづみ)」と呼ばれる技法で作られた石垣もガーデンに一層の趣を添えている。

訪れる人を笑顔にする美しいガーデンは、雄勝花物語の代表である徳水利枝さんが、津波で文字どおり瓦礫の町となった雄勝で、亡くなった家族を弔うために実家跡地に花を植えたことから始まった。たった一人から始まった取組だったが、やがて夫の徳水博志さんも共同代表として活動を支えることになった。そして被災地の緑化支援を行っていた千葉大学園芸学部の准教授・秋田典子さん、「花と緑の力で3.11プロジェクト」委員長の鎌田秀夫さんをはじめ、多くの人たちの共感と支援を得て、さらに活動は広がっていく。

震災後7年で、地元住民のほか、企業や大学、様々な団体から延べ8000人の

ボランティアが訪れ、今も多くのボランティアの協力によってガーデンは進化を続けている。災害危険区域に指定され、今も土地の造成が続く地域にあって、ガーデンの存在は復興に向けた希望となっている。

活動の自立化と 地域の復興に向けた挑戦

一方で、雄勝花物語ではいくつかの課題も抱えていた。例えば、これまでの活動資金は主に助成金により支えられていたが、復興・創生期間も終わりに近づく中、自主財源の確保が求められていた。

また石巻市雄勝総合支所では、ガーデンを核にして、周辺の低平地で花と緑を活かした住民主体のまちづくりを進めていく「雄勝ガーデンパーク構想」が平成29年5月に策定されていたが、その実現の道筋は明確になっていなかった。

これらの課題に取り組み、活動の自立化と地域の復興に挑戦するため、専門家派遣型のハンズオン支援を受けることとなった。

支援を通じて再確認した 「つながり」の大切さ

ハンズオン支援では、収益事業の確立に向けて、雄勝花物語のメンバー、千葉大学の秋田先生と学生、鎌田さんのほか、雄勝で体験宿泊施設を運営するモリウミアス、復興庁、支援事業者が集まってワークショップを重ね、雄勝花物語に合った商品アイデアの洗い出しや試作品開発を行ってきた。また、交流会型研修での他団体との交流・対話を通じて、雄勝花物語の活動のあり方や大切にしていることを改めて見つめ直した。そうした中で徳水ご夫妻が感じたのは、自分たちの活動の原点である「つながり」の重要性であったという。

「はじめは、ガーデンの運営のために売上を立てなくてはいけないということが頭があって、とにかくどうやって利益を出すのかを考えていたんです。自分たちはそういうことは苦手だし、お金をもらうことへの抵抗もあって、なかなかうまくいきませんでした。でもハンズオン支援や研修の中でたくさんの外部の方とお話して、「何もなくなってしまった



徳水利枝さん(左)・博志さん(右)

雄勝の町をきれいにしたい」、「人がつながる癒しの場にしたい」という当初からの想いを伝える大切さに気づくことができました。商品に「つながり」に感謝する想いを込めることで、結果として利益はついてくる。そういう考え方で進んで大丈夫だよ、とみなさんに背中を押してもらうことができました。(利枝さん)

「『つながり』を大切にしてきた自分たちの取組が間違っていなかったとわかって、自信になりました。今までに築いてきた『つながり』が、きっとこのガーデンを持続可能なものにしてくれると思うようになりました。」(博志さん)

「つながり」を大切にしながら新たな試みも既に始まっている。その一つが、宿泊施設モリウミアスと連携したモニターツアー。ツアーでは、参加者にガーデン造りに参加してもらうとともに、語り部との対話や、郷土料理の昼食、雄勝の女性たちとの交流、ハーバリウム制作体験な

ど、雄勝をより深く知り、つながるプログラムを提供。参加者からも、雄勝の女性たちをはじめとした協力メンバーからもいい反応が得られ、利枝さんは手応えを感じているという。今後、雄勝花物語の歩みと想いを伝える動画も作成し、さらに共感の輪を広げていく予定だ。

雄勝ガーデンパーク構想の 具体化

ハンズオン支援では、石巻市雄勝総合支所とともに低平地の利活用を目指す構想の具体化も進めてきた。雄勝ローズファクトリーガーデンを中心に、パークゴルフ場や研修農園、花や果実の摘み取り農園、花と緑の広場などによる利活用の計画を具体化することができた。一部エリアについては市の予算を確保し、計画実現に向けて詳細設計も進めている。

博志さんは、構想の具体化に向けて議論を重ねてきたことで、「行政との連携も深まった」と感じているという。今後



「北限のオリーブ」生育の様子

も住民、地元団体と行政の連携のもとで、構想の実現に向けた取組を進めていく考えだ。

今後に向けて～まちを 未来に引き継ぐために

今年度のハンズオン支援を通じて見出した活動のあり方を大切にしながら、利枝さんは雄勝の低平地をさらに人の手で蘇らせていく活動を今後も続けたいという。ガーデンの外にもラベンダーなどで彩られた空間が広がり、そこにたくさんの方が集い笑い合う未来を思い描いている。

博志さんはさらに、ガーデンと低平地の利活用によって雇用を生み、持続可能なまちづくりにつなげることを目指している。ガーデンの隣には、オリーブ畑が広がっているが、順調に生育すれば、2年後にはこれを「北限のオリーブ」として販売できる見込みだ。雄勝の地で人がつながり、なりわいが営まれる未来に向けて、雄勝花物語の挑戦は続く。



制作体験・購入できるハーバリウム



雄勝ローズファクトリーガーデンの様子



国見町で平成30年10月に実施した「短期ホイスコーレ」の様子。全国から多様な参加者が集い、2泊3日のプログラムで学びあった。

Zoom up
福島県
国見町

高校のない小さな町を 「人生の学校」に変えていく

国見ホイスコーレプロジェクト

福 島県国見町は、人口約9300人で高校や大学のない小さな町だ。中学を卒業すると町から離れてしまう若者との接点をつくり、学びの場を提供したいという思いから始まった取組は、町をまるごと「人生の学校」とすることを目指す「国見ホイスコーレ」プロジェクトへと結実した。プロジェクトでは下記の3つのプログラムが提供されており、今後もさらに拡充される予定だ。

国見ホイスコーレの始まり～ゼロからのスタート

「国見ホイスコーレ」構想は、初めからあったわけではない。平成28年度の取組開始当初は「若者」と「学び」というテーマはあれど、何をどう進めていくか、ゼロベースで考えなければいけない状況だった。そこで国見町は、復興庁事業によるハンズオン支援※を受け、ま

ずはイベントを企画して若者との接点をつくり、声を聴いていった。

若者の声から浮かび上がったのは「人生の学校」というコンセプト。それを具現化するためのモデルを探すうちにデンマーク発祥のフォルケホイスコーレに行き当たる。これは、性別・職業を問わず17歳以上の多様な人々が集い、寝食を共にしながら対話を通じて学び合い、自分を見つめ直す場である。

国見プロジェクト学習

中学生が学校で学べないことを、学年の垣根を越え、対話を通じて学ぶ



国見カスタムラボ

高校～若手社会人がチームでやりたいことや想いを形にする楽しさ・難しさを学ぶ



短期プログラム

高校生以上の多様な参加者がともに暮らし、地域資源を活かした学びを実践



※:平成28年度は「自治体版ハンズオン支援事業」、平成29年度は「地域づくりハンズオン支援事業」に採択されている。

これを国見流にアレンジしてできたものが、若者に多様な出会いと対話と実践を通じた学びの場を提供し、町を「人生の学校」へと変えていく「国見ホイスコーレ」構想だった。

構想をカタチに～走り続けて得た確かな手応え

出来上がった構想をかたちにすべく、平成29年度は「国見プロジェクト学習」「国見カスタムラボ」の実践と、「短期プログラム」の設立準備に取り組んだ。どれも初めての取組だけに集客には苦労した。町内でのチラシ配布はもちろん、近隣の高校や大学を訪問しPRするなど、できることは何でも実行した。

苦労の甲斐あって、各プログラムでは何とか参加者を確保することができた。また、多くの外部専門家や大企業のCSRの力も借りて実施したプログラムは評判を呼び、回を重ねるごとに参加者も増えていった。

運営に携わるメンバーも徐々に手応えを感じるようになる。例えば「国見プロジェクト学習」に参加した中学生からは、「学ぶことの目的や楽しさを感じることができた」という感想が寄せられ、「国見カスタムラボ」では高校生や大学生が自らイベントの企画を成功させ、メディアからも大きな注目を集めた。「短期プログラム」設立準備では、魅力あるカリキュラムづくりや東京での情報発信等を通じて、地域内外の多世代の新たな繋がりが生まれた。

取組を中心となってリードしてきた国見町企画情報課総合政策室長の八島章さんは、プログラムを通じて人の成長する瞬間に立ち会えたことも大きな喜びだったという。

「あるイベントに、大人に混じって高校生が参加してくれたんです。そういう場合は多分初めてで、居心地が悪そうにしていたんですが、イベントが進むにつれ変わってきて、最後には誰より立派に発表していました。彼が一步を踏み出し変わる瞬間に立ち会えたことが本当に嬉しかったですね。」(八島さん)



国見町企画情報課総合政策室長 八島章さん



福島大学 佐藤大輝さん

短期プログラム～これまでの集大成

復興庁事業での支援が終了した今年度も、「国見プロジェクト学習」「国見カスタムラボ」は引き続き行われている。そして「短期プログラム」は、平成30年10月に2泊3日で開催された。

短期プログラムでは、国見町の豊かな食や古民家での生活を共にしながら、他の参加者や地域の方々との対話、「学び」や「暮らし」の意義を問直すプログラムが組まれた。参加者は15名。年齢は19歳～47歳で、福島の大学生から東京の大企業に勤務する方、岡山や高知で暮らす方まで多種多様な参加者が集まった。

参加者にとってこの3日間は貴重な体験になったようだ。「国見カスタムラボ」にも関わっている福島大学3年の佐藤大輝さんは次のように短期プログラムを振り返る。

「普通、イベントに参加してもそこまで周りの人と仲良くなれないですが、一緒に食事をして、古民家に泊まって、2日目になると昨日出会ったような感じがしない、家族のような関係になっていました。いつものコミュニティとは違う、もう一つの帰る場所ができたような気がします」(佐藤さん)

参加者の間では、短期プログラム終了後もオンライン・オフラインでの交流が続いており、また国見に来たい、住んでみたいという声もあるという。濃密なプログラムは、普段出会うことのないだろう参加者を結びつけ、国見町と参加者の絆も確かに紡いでいる。

今後に向けた展望～取組の発展と自走に向けて

国見ホイスコーレは、向こう2年間は県の補助を受けて継続していく見込みである。その間、これまでのプログラムを磨き上げ、拡充していくとともに、さら

にその先の財源確保のあり方や自走のための体制についても検討する予定だ。

また、町内の連携をを広げ、国見ホイスコーレの中で育まれた地域内外の「つながり」を活かし、「学び」を中心に据えたまちづくりの取組も始まっている。今年度は、これまで取組の中心となってきた企画情報課だけでなく、学校教育や生涯学習などの担当課も引き、国見町の教育のあり方について検討する「ビジョン会議」を行っている。国見町では、コミュニティ・スクールを基盤とした幼保小中一貫教育にすでに取り組んでおり、これに既存の生涯学習、さらには高校生や大学生、社会人も巻き込んだ国見ホイスコーレが連携することで、「学び」を核にしたまちづくりが進展していくものと期待される。

加えて、最近、「国見カスタムラボ」などに関わった学生が国見町役場への入庁を希望するケースが増えているという。「学び」をきっかけに国見町を好きになった若者が、国見町を元気にするプレーヤーとして活躍する好循環が生まれつつあるようだ。



短期プログラムの参加者に地元郷土料理を振る舞った国見町のお母さんたち。



短期プログラムの様子。対話と内省による学びの時間。

観光
担い手育成

観光の担い手の創造と連携で
三陸の暮らしを誇りに

宮古観光創生研究会

岩 手県宮古市は、三陸でも有数の景勝地、浄土ヶ浜を有し、古くから観光をなりわいとしてきた。近年、道路整備やフェリー就航などで交通インフラが充実。三陸の玄関口となることが期待される一方で、現地を素通りされる通過型観光地化のリスクもある。また、観光のニーズが発地型から着地型へシフトする中、地域の多様な担い手が連携し、観光客を受け入れることが必要となってきたが、地域内の観光の担い手はまだ少ない。

宮古観光創生研究会は、こうした地域の現状と将来に危機感を抱き、一方では可能性を感じていた若い世代を中心に、平成27年に発足した。メンバーは元々観光のプロではなくそれぞれ別に本業を持っているが、一から観光を学んでモデルツアーを考案・実践したり、地域の観光拠



Leader's Profile / 花坂雄大
[写真中央]
宮古観光創生研究会 代表
花坂印刷工業株式会社 代表取締役
宮古市出身。家業の印刷会社を経営する傍ら、宮古市の観光振興の方向性を検討するため、平成27年に宮古観光創生研究会を設立。地域の若手有志12名(平均年齢31歳)と、様々な活動を行っている。

点を目指すゲストハウスをオープンするなど精力的に活動を続けてきた。その中で、地域で暮らす人々を広く巻き込み、より多くの担い手を育成し、相互に繋いでいく仕組みの重要性を感じるようになった。

そこで今年度の取組では、地域で暮らす若者を中心に観光を学べる、観光業学習カリキュラム(連続勉強会「リアス式観光ゼミ」)を開発・実施している。単にカリキュラムをつくるだけでなく、観光コン

テンツの企画・実践も併せて行い、若い世代が観光を学習するサイクルの確立を図っている。

その他、整備されるハードを活かした三陸広域との観光連携のあり方や、フェリーにより繋がった北海道室蘭市との連携のあり方についても検討を進めている。

Pick up P.17へ

賑わい
関係人口

福島県の中山間地域活性化のモデルを目指す
「大地の泉」復活・創生プロジェクト

小町温泉組合

福 福島県田村郡小野町は、温泉を中心とした観光業で栄えたが、地域の高齢化・人口減少に加えて、震災後の風評被害等により、賑わいを失いつつある。こうした中でも、商工会青年部メンバーを中心に、自身の周りにあるものの魅力を掘り起こし、地域の歴史やリソースを活かした様々な地域活性化の取組が行われてきた。今後は、こういったアクションが、地域の若手に伝播していくことを目指す。

今年度は温泉旅館跡地から沸き立つ源泉(通称「大地の泉」)を地域のシンボルに据え、地域でわくわくするような取組を企画・実行できる人材の育成や地域外の人材との連携等に取り組む。具体的には、町内外の方が小野町の「まち歩き」を行った後で開催した「湧く沸く

会議」。自分自身の想いを見つめ直し、新たな一歩を踏み出す意思の醸成を目的とし、高校生も参加した「湧く沸くスクール」。また、地域内外の人々の関心を高めるべく、「大地の泉」をシンボルとしたストーリー作りを行う「湧く沸くラボ」を開催した。特に、「湧く沸くラボ」を題材として制作した映像は、小野町のプロモーションビデオとして公開されるとともに、次年度以降も様々な事業の中で、小野町のストーリーとして繋いでいく予定だ。12月に開催された共創イベントでは、地域の若手を中心に、地域内外の多様な者が集まり、小野



Leader's Profile / 二瓶晃一
小町温泉組合代表/まちづくりofficeこまちvision 代表
小野町観光協会会長
4代続く温泉旅館「磐山荘満太屋」を営む傍ら、小野町をシンボルとした地域のPR活動、タウン誌発行、郷土誌執筆、地域劇団立ち上げ、地元中学・高校での地域学習の非常勤講師など、一貫して小野町の地域活性化に取り組む。

町での新しい取組を継続させる仕組みについて話し合われた。今後はそのアイデアの具現化に向け、活動を進めていく予定だ。

移動支援
インフラ構築

安心して生き抜く地域をつくるための
公共の再構築プロジェクト

特定非営利活動法人 移動支援 Rera

特 定非営利活動法人 移動支援Reraは、宮城県石巻市で震災直後から被災者の移動支援に取り組み始め、その後も高齢者・障害者などへの移動支援を継続。7年間で延べ15万人の移動を支援してきた。

移動支援を通じて、地域社会で生き生きと自由に生活を楽しむために「移動」が重要な要素である一方、災害や健康、人間関係など様々な理由から自由に「移動」できない人々も多く存在することを実感している。Reraの活動をサポートする流れも十分には広がらず、増え続ける支援が必要な住民への対応に支援体制が追い付かなくなりつつあり、地域でそういった住民を支える仕組みが築けていない現状に危機感を抱いていた。

共創イベントではこうした問題意識の



Leader's Profile / 村島弘子
特定非営利活動法人 移動支援 Rera代表
東日本大震災発災後、平成23年4月に石巻市で支援活動開始。平成25年2月に移動支援ReraとしてNPO法人格取得。代表に就任し現在に至る。移動支援の担い手育成や政策提言にも取り組む。

もと、支援を必要とする人々だけでなく、周囲で支える立場の人々も集まり、それぞれの立場の声を融合する形で、「移動」の価値やすばらしさを伝える「広報物」と、「移動」やおでかけのしやすさの可視化を目指した「試作物」を作成。「広報物」をWEB上に公開することで、「移動」に対する理解を深め、地域の誰もが「自分ごと」として捉えるとともに、支援が必要な

住民を支え合うための意識を育むことを目指す。また、「試作物」の基になるデータセットのオープン化も目指しながら、「移動の自由」を実現するためのインフラ研究会が発足。支援が必要な人々の「移動」を促進するためのモビリティインフラの構築と社会実装を目指している。

伝統工芸
担い手

オープンイノベーションを活用した
新しい概念の産地・仕組みづくり

大堀相馬焼 松永窯

Leader's Profile / 松永武士
大堀相馬焼窯元「松永窯」4代目
株式会社ガッチ 代表取締役
福島県浪江町出身。明治43年創業の窯元の4代目。大学在学中に起業。海外を舞台にヘルスケア関連事業を展開。震災後、海外事業を譲渡し帰国。大堀相馬焼の復活に向け、企画販売から人材教育まで幅広く活動。

大 堀相馬焼は、福島県浪江町の大堀地区一円で生産される伝統的工芸品の焼物である。震災前は11の窯元が活動していたが、震災後に離散し、窯元同士の結びつきが弱まるとともに、窯元の高齢化の波も相まって廃業に追い込まれる窯元も見受けられた。市場環境も厳しさを増す中、窯元同士が協力して人材育成を進める必要性は共通認識としてあるものの、元々競い合う関係であった事情に加え、物理的な距離が大きな障壁となり、十分に結束できずにいた。

このような現状を打開すべく、今年度は、地域おこし協力隊制度の活用による人材育成など新たな取組を積極的に進めてきた松永窯が手を挙げ、大堀相馬焼の窯元同士の結束力強化と、新たな担い手を育む仕組みづくりに取り組むこととなった。外部の知見も借りつつ、大堀相馬焼の伝承を、旧来の家業に新たな仕組みを取り込むことで、時代に即した伝統工芸のあり方を築こうとしている。



具体的な取組としては、大堀相馬焼の製造工程の再整理から分業化の可能性を探るとともに、他業種の事例も踏まえた担い手確保の仕組みの検討を進めている。共創イベント等でも、大堀相馬焼に適した担い手確保の仕組みについてアイデアを募った。得られたアイデアを活かし、さらに担い手に求められるスキルの可視化、大堀相馬焼のブランド力の維持・向上を目指した認証制度の検討も進めている。

なお、継承問題は、大堀相馬焼のみならず全国のあらゆる業種で課題となっている。今年度得られた知見は、他の伝統工芸等にも横展開できるように、提言していく予定だ。

Pick up 宮古観光創生研究会



共創イベント2日目(11月4日)の様子
この日は、地元住民が中心となってグループで検討した観光コンテンツを、専門家からのインプットやフィールドワークを交えて、ブラッシュアップした。

「日常を開く」がキーワード! 地域ぐるみで生み出す観光なりわい アイデアソン参加レポート

観光の担い手の創造と連携で三陸の暮らしを誇りにプロジェクト

活動経過と予定

平成27年10月

団体発足

基礎知識の勉強会

平成29年12月

モデルツアーの実施

平成30年6月～

連続勉強会(第1回)
観光ミニアイデアソン

連続勉強会(第2回)
現地の魅力の引き出し方を
学ぶ勉強会

連続勉強会(第3回)
地域外との交流
アイデアのブラッシュアップ

連続勉強会(第4、5回)
アイデアの実行に向けた
仕掛けを学び、実践する勉強会

連続勉強会(第6回)
実行案の発表会

連続勉強会(第7回)
次年度へのつなぎの場

岩 手県宮古市は、県中央部の沿岸に位置する人口5万3000人ほどの地域である。古くから水産業、製造業、建設業、観光業などが盛んだが、震災以降、地域の将来に危機感を感じる若い世代を中心に、観光に関する取組が活発化している。

宮古観光創生研究会～ 地域への危機感から活動へ

観光に関する取組の中心を担うのは、宮古観光創生研究会。地域の若者が中心となり平成27年に設立された団体である。観光に関する基礎勉強会の開催や、三陸DMOセンターなどと連携したモデルツアーの実施等、精力的に活動を続けてきた。

団体の代表である花坂雄大さんは、地域で印刷業を営んでいる。印刷業という職業柄、様々な業種の人と付き合いがある中で、年々、地域の活力が失われつつあることを肌で感じ、危機感を抱いていたという。

観光に携わる仲間を増やし、取組を前に進めるため、今年度はハンズオン支援を活用して、地域向けの観光業学習のカリキュラムづくりを行う連続勉強会(全7回)を開催することになった。

第3回の勉強会は、地域外の参加者も招いて観光によるなりわいづくりのアイデアを募る共創イベント。ここからは、1泊2日で行われた共創イベントの参加レポートで、宮古市の取組の様子をお届けしたい。

共創イベント～ 1泊2日のアイデアソン

11月3日(土)、宮古市の天気は快晴。宮古市中心市街から更に車で20分ほどの場所にある浄土ヶ浜レストハウスで、共創イベント『宮古発!地域ぐるみで生み出す観光なりわいアイデアソン』が始まった。

参加者は総勢37名。高校生から東京の会社員、地元で水産加工業を営む事業者まで、様々な参加者が地域内外から集まった。



共創イベントを振り返る宮古観光創生研究会代表の花坂さん。

まずは3名のインプットトークからイベントが開始。1人目の花坂さんからは、宮古観光創生研究会の想いが伝えられた。研究会の活動のキーワードは「日常を開く」。地域を想い観光に関わる一人ひとりが、日々の楽しみや好きなことを外に開き、発信する——その積み重ねが地域のファンを増やし、もっと知りたい、来てみたいと思ってもらうきっかけになるのではないかと考えているという。続いて三陸DMOセンターの北田耕嗣さんは、平成31年3月に全線開通する三陸鉄道の観光資源としての魅力を紹介。観光コンサルタント・釘持勝さんからは、宮古市の取組にもヒントとなりうる世界各国の観光による地域づくりの事例が紹介された。

3つのインプットトークの後は、チームを編成。連続勉強会(第1回)実施されたミニアイデアソンで出た観光づくりのテーマ案を参考にしながら、地域内外の参加者がそれぞれ関わってみたいテーマを選択。「食」「農業」「やませ」「三陸鉄道」「ものづくり」「人物図鑑」の6チームが出来上がった。

ここから先は、チームごとにテーマに沿った観光づくりのアイデアをブラッシュアップしていった。途中、偶然同日別イベントのためフェリーで室蘭市から宮古市を訪れていた方々も合流し、アイデア交換も行うなど、活発な対話の中で検討が進められた。

1日目の夜は、懇親会も開催。食べることが好きだという花坂さんのプロデュースで、地元住民が絶対おすすめできる食べ物、いわば4番打者だけを集めたメニューが参加者に振舞われた。食という「日常を開き」かたちにしたメニューに、参加者一同舌鼓を打って1日を終えた。

2日目の11月4日(日)は、朝からチームごとにフィールドワークに出かけた。訪問先もチームごとに考えて選択。飲食店、参加者農家の果樹園、鍛冶職人



2日目の朝から実施したフィールドワークの様子。「農業」チームは参加者農家の果樹園等を見学。

の工房などのスポットを回り、地域の人と直接交流しながらアイデアのブラッシュアップを進めていった。

午後は浄土ヶ浜レストハウスに戻り、アイデアを仕上げていった。最終発表では、各チームから、食事処のマップ作りや、農業やものづくりの体験コンテンツ提供、やませを活かしたドローン研修、鉄道車両を活かした子どもも大人も楽しめる遊びや習い事の提供といった様々なアイデアが発表された。最後に講評として復興庁より、密度の濃い1泊2日間へのねぎらいと、地域内参加者はアイデアを形にしてほしいこと、地域外参加者はこれからも宮古市に関わり続けてほしいことが伝えられ、イベントは終了した。

イベントを終えた花坂さんは、次のように2日間を振り返った。

「地域内のメンバーだけでは出てこないようなアイデアが生まれてよかったです。地域への危機感や、「稼ぐ」観光はもちろん大事ですが、それを訴えるだけでは、今までかかわりを持ていなかった多くのまちの人の興味を引くこ

とはできません。でも、「日常を開く」をきっかけにして、まちの人がほんの少しずつでも観光に関わるようになれば、すごいことが起こるんじゃないでしょうか。誰もが観光客に「ようこそ」と言えるまちは、きっととても魅力的ですよ。今回の共創イベントをきっかけに、地域の若者がもっと観光について考える機会を提供できたらと思っています。まずは、そこから始めていこうと思います。」(花坂さん)

その後の展開～ アイデアを実践につなげ次年度へ

宮古観光創生研究会では、共創イベント後も専門家を講師とした連続勉強会を実施しながら、各観光コンテンツの磨き上げを継続し、順次実践につなげる予定だ。さらに3月に予定している第7回連続勉強会では、今年度の取組や成果の振り返りを行うとともに、来年度以降自走化の上での活動方針・計画を勉強会参加者で議論することになっている。



東北が誇る絶景、浄土ヶ浜。イベント会場からも絶景を臨むことができた。

共創イベントで得られたアイデアと人とのつながりを活かし、起業に至った「みんなのたんす」代表の高橋えりさん。地域での認知度を高めながら、着実に会員数を増やしている。

Zoom up
宮城県
気仙沼市



人を育むまちと共創の力が生む シェアリングエコノミー

シェアリングエコノミーを活用した「共助」によるまちづくり・産業づくり

宮 城県気仙沼市では、東日本大震災以後、復旧・復興に向けた市民活動が活発化し、市外からも復興支援に多くの人々が訪れた。市内の人々の活動と相互の交流がまちに新たな動きも数多く生んできた。一方で、震災前から直面してきた人口減少や少子高齢化はさらに進行。経済環境も厳しさを増し、依然として多くの地域課題を抱えている。

地域課題解決の手がかりの一つとして市は「シェアリングエコノミー」に着目。平成29年度に復興庁の「共創力で進む東北プロジェクト」に参加し、「若者が稼ぐ町を実現する課題解決型シェアリングエコノミーとは？」をテーマに共創イベントを開催した。その結果、共創イベントを通じてアイデアを磨き上げた参加者が、地域内で起業するという成果も生まれている。

こうした気仙沼市の復興に向けた歩みや、共創イベントを開催することになった詳しい背景について、気仙沼市震災復興・企画課小野寺憲一さんにお話を伺った。

震災後に生まれた、未来を支える多様なプレーヤー

震災後の気仙沼市では、がれき撤去や被災者支援、コミュニティ・商店街の再生などの市民活動が活性化。また、市外から多数のボランティアやNPO、企業が市内に訪れ、さらにそこから移住する「ヨソモノ」も現れた。市民と「ヨソモノ」が出会い、交流することで化学反応が生まれ、まちの課題解決に自ら取り組むリーダーも生まれてきたという。

加えて、さらに地域リーダーを育成するための取組も地域内外の連携の下で活発に行われてきた。経営人材育成を行う人材育成道場「経営未来塾」や「経営人材育成塾」、まちづくり人材を育成する「ぬま塾」や「ぬま大学」、高校生、女性、シニアを対象とした取組など、数多くの人材育成プログラムが市民と企業・NPO・行政の連携の下で行われ、多様なプレーヤーを輩出してきた。

小野寺さんは、気仙沼の未来を支えるこうしたプレーヤーが、「ベクトルを合わせ、同じ方向を向く」ことで、より大きな動きを生み出していくことが大切だという。これまでも、「経営未来塾」をきっかけに漁師や水産加工業者・仲買人がつながり、連携して新たな事業を立ち上げた例があるが、人材育成の取組とプレーヤー同士の連携が進むことで、新たな展開が加速していくことが期待される。

地域課題解決のヒント～シェアリングエコノミー

ただ、気仙沼の未来を支えるプレーヤーが増える中でも、解決すべき地域課題は山積している。大きな課題のひとつが、若者が高校を卒業してまちを離れると、そのまま気仙沼市外に就職・定着してしまうことだ。解決の糸口を探るため市内の高校生にアンケートを



気仙沼市震災復興・企画課 小野寺憲一さん

とったところ、若者に市に留まってもらうには、多様な仕事の選択肢があることが重要だと見えてきた。

新しい経済を生み出すヒントとして行き着いたのが、「シェアリングエコノミー」。使い切られていないモノや場所、個人のスキルや時間、資源などを有効活用することで新しい価値を生むという考え方。新しいなりわいづくりや、身近な生活課題の解決にも役立つ考え方である。

とはいえ、シェアリングエコノミーをどのように取り入れればよいのか、行政だけで検討するには限界があった。そこで「共創力で進む東北プロジェクト」に参加して共創イベントを行い、シェアリングエコノミーに関する知見とノウハウ、そしてそれを体現するアイデアを地域内外から集めることになった。

平成29年8月に2日間にわたり実施された共創イベントには気仙沼のプレーヤーや高校生、地元金融機関関係者など計42名が参加。多くのアイデアが生まれた。共創イベントを振り返り、小野寺さんは「シェアリングエコノミーについて考える機会とそれを実行するプレーヤー同士の出会いをいただけたことが大きな収穫でした」と語る。

シェアリングエコノミーを実行するプレーヤーとは、共創イベントで最優秀提案を行い、その後、気仙沼での起業まで辿り着いた、高橋えりさんだ。

アイデアをカタチに～みんなのたんす 高橋えりさん

高橋さんは「ぬま塾」「ぬま大学」に参加し、古着屋のない気仙沼に子ども服のシェアリングサービスをつくる構想を練っていた。そんな折に市役所職員からの誘いを受けて共創イベントに参加した。

共創イベントでは人との出会いに期待する一方で、事業の構想が具体的に

まとまっていなかった中で参加していいのかと不安を抱えていたが、実際に参加してみると、そんな不安は払拭されたという。

「初めて出会った5名の方々とチームを組みアイデアを具体化していったのですが、自分では思いつかないようなアイデアがぽこぽこ生まれてきて、驚きました。一晩同じ目標に向かって考えるだけで、あんなに結束できるのかと。共創イベントの場は、何をいっても大丈夫という安心感のある、とてもポジティブな場で居心地が良かったです。」

さらにアイデアソンを通じて、事業内容も具体化していった。

「共創イベントでの対話から、子ども服をシェアするだけでなく、子育て世代の交流拠点となるお店を作りたいという思いが強くなりました。気軽に訪れられるよう、お金を毎回払わない仕組みにしたいと考え、会費を払うと決められた枚数まで自由に子ども服がシェアできる、会員制のお店に行き着きました。」(高橋さん)

その後、高橋さんは地元のNPO法人ピースジャムや、地元金融機関からのサポートを受けながら、さらに事業の計画を具体化。平成30年8月には、既存商店の一角を改装して「みんなのたんす」というお店をグランドオープンした。地域でサービスを広げながら、将来的には他の地域にも同じ仕組みを広げていきたいという。



共創イベントを振り返る高橋えりさん。共創イベントでの地域内外の人々との対話は、視野を広げ、自身の思いも強まる機会となったという。

気仙沼の人づくりと共創の力が挑戦を後押し

高橋さんの事業の構想は、気仙沼の人材育成の取組の中で生まれ、共創イベントでの対話や出会いによって具体化された。開店に至るまでにはさらに行政や地元NPO、金融機関の支えがあった。市が力を入れてきた人づくりと共創イベントの2つが組み合わさり、新しいビジネスの誕生を後押しする力になったといえるだろう。

社会の変化をとらえ 変わり続けられる行政

気仙沼市は震災後にめまぐるしいまちの変化を経験し、その後も共創やシェアリングエコノミーといった新たな考え方を取り入れ、地域課題解決に取り組んできた。小野寺さんは、今後も社会の変化をとらえ、行政が変わり続けることが大切だと考えているという。

「持続可能性が重視される中で、変わり続けられる行政でいたいと考えています。今後、どのような出来事が起きるかは分かりませんが、いつも環境の変化を機敏にとらえ、地域住民と一緒に課題解決に取り組める行政でありたいと思います。」(小野寺さん)

こうした行政の姿勢は、今後も続く社会の変化に対応しながらまちづくりを進めるための力になるだろう。

専門家派遣型 交流会型研修

地域づくりの現場で学び仲間をつくる

交 流会型研修は、専門家派遣型の支援対象団体と一般参加者が、地域づくりの考え方・ノウハウを学習するとともに、相互に交流し支えあう関係を築く研修です。

8月から11月にかけて3回にわたり実施された研修では、4つの支援対象団体のほか、先進的なまちづくりを行う宮城県女川町、山形県川西町のNPO法人きらりよしじまネットワークの現場を視察。各地のプレーヤーから活動のノウハウを学び、交流を深めました。さらに、これら現場からの学びを活かしつつ、参加者それぞれが抱える課題を捉え直し、今後のアクションを構想しました。



第1回 日程 平成30年8月30日～31日
場所 宮城県女川町、石巻市、東松島市

- 石巻市、東松島市の地域づくりの現場を視察。
- 女川町の復興を支える阿部喜英さん(復幸まちづくり女川合同会社代表社員)より講演。



第2回 日程 平成30年10月22日～23日
場所 山形県川西町

- NPO法人きらりよしじまネットワークの活動現場を視察。
- 事務局長・高橋由和さんより地域づくりの考え方・ノウハウを学ぶ。



第3回 日程 平成30年11月29日～30日
場所 宮城県気仙沼市

- 気仙沼市のまちづくりの現場を視察。
- 2回の研修も踏まえ参加団体の課題や今後のアクションを検討。



共創イベント型 ファシリテーター育成研修

多様な人々とアイデアを創出する技法を学ぶ

フ ァシリテーター育成研修は、東北被災地でアイデアやつながりの創出を促す「ファシリテーター」の役割を担う人を対象に、地域課題を解決に導く力を養う研修です。

研修では、日本有数の実績と知見を持つ、エイチタス株式会社 原亮さんを講師に迎え、アイデアを育むための場づくりの考え方とファシリテーションの基本的技法を学びました。さらに多様な人々のアイデアを融合し、新たなアイデアを生み出すアイデアソンの設計方法を学び、グループごとにアイデアソン企画を実践しました。

参加者は、実践を通じて学んだノウハウを地域に持ち帰り、自身の職場などで活かしています。



第1回 日程 平成30年9月4日
場所 東京都千代田区
参加者数 19人

第2回 日程 平成30年9月10日～11日
場所 宮城県仙台市
参加者数 17人

第3回 日程 平成30年9月18日～19日
場所 福島県郡山市
参加者数 14人

研修の流れ

基礎から応用・演習までを合計7時間で速習

- 1 [講義] 地域での共創ワークの事例解説
- 2 [演習] 共創ワーク(アイデアソン)ミニ体験
- 3 [講義+演習] 共創ワークの設計術
- 4 [講義+演習] 共創ワークとファシリテーションのテクニック
- 5 [演習] 共創ワークの企画づくり演習



研修参加者インタビュー

郡山市政策開発課統計政策係 主事 佐藤佑大さん

研修に参加しての感想をお聞かせください。

交 流会型研修は、これまで自分が参加したことのあるスキルの習得等を行う従来の研修とは全く違ったものだと感じました。支援対象団体の皆さんと深く関わり、行政職員でありながらも第三者の目線から地域課題について真剣に考えることができた時間は大変有意義なものでした。野蒜まちづくり協議会の皆さんの地域づくりへの熱い思いはとても刺激的でした。こんなに率直な意見を聞いたことも初めてで、中には行政がサポートできるものもあると思います、自分の業務においてももっと市民の方と話す機会が必要だと実感しました。

一緒に研修に参加した皆さんの印象はいかがでしたか。

誰 一人として、誰かに何かをやってほしい人がいない場というのは新鮮で、主体性を持った皆さんの集まりでした。大枠としては、復興・創生ということになるかと思いますが、アプローチの仕方や原動力、行政に対する考え方はそれぞれで、その一つひとつが新鮮でした。

研修のその後について教えてください

ス キルを習得する研修ではないので、研修を通じて得た様々な刺激や気づきから、自分がどう行動するかが大切だと思っています。今はまだ何かアクションを起こしている訳ではないですが、研修から得られたたくさんものを、まずは今の自分の業務で生かしていきたいと思っています。



公益社団法人福島県看護協会 被災者健康サポート事業コーディネーター(保健師) 林 淳子さん

研修に参加された経緯をお聞かせください。

福 島で地域の支援活動をしてきたのですが、なかなか地域のみなさんから具体的活動につながるアイデアを引き出せずに苦勞していました。私もファシリテーターのスキルを身につけ、実践に活かしたいと思い、参加しました。

研修に参加されてみて、いかがでしたか？

と にかく楽しかったというのが一番の感想ですね。どんどんアイデアを出していく楽しさが体感できました。また、臆せず自由に、立場の違いを超えて平等に意見を出し合える場作りの大切さを学ぶことができました。

研修後、ご自身で取り組んだことをお聞かせください。

研 修で学んだことを活かして自分で場づくりを行ってみました。支援活動を行う保健医療専門職の方、15名ほどにお集まりいただき、アイデアを出し合ってもらいました。実際にやってみると進め方が難しく、特に、はじめはあまりアイデアを出してもらえず、苦勞しましたが、途中からどんどんアイデアが出るようになり、参加者のみなさまにも楽しんでもらえたと思います。

最後に、研修について感じたことをお聞かせください。

ふ だん会うことのない色々な職種の方たちと楽しく一緒に考えられる、貴重な機会でした。ありがとうございました！

